

巻頭言

異分野融合

千葉聡（センター長、教授）



我がセンターの大きな特徴は、文系から理系まで様々な分野の研究者がいて、多彩な研究活動が展開されていることである。地域研究という線で繋がっているけれど、歴史学、文化人類学、社会学、考古学から地質学、生態学、環境工学まで、異なる専門分野が一つの部門に集まっている状況だ。研究機関は、ある程度専門の近い研究者が集まるのが常なので、人によってこの環境は、とても魅力的かつ刺激的に感じられるようだ。

個人的な意見を述べると、実はここに着任した時、ある意味、非常に懐かしさを覚えた。私事になるが今からおよそ35年前、大学生だった私は地理学を専攻していた。私の所属していた教室は、人文地理と自然地理が同居していたため、地理研究という線で繋がっているけれど、社会学、歴史学、文化人類学、考古学から火山学、地形学、気象学、地球物理学、生態学、環境化学、都市工学まで、異なる専門分野がひとつの教室に集まっていた。セミナーも異分野の話聞くのが常だった。要するに、今の私の状況とあまり変わらない。

元々私は、民俗学や文化人類学の研究をするつもりでそこに進学し、それなりに勉強もして、四国・徳島県にある某漁村の社会構造を卒業研究テーマに選んで予備調査までしたのだが、指導予定の教員が異動するなどして、結局、全く想定外の分野の研究をするこ

とになった。

だが、それを契機に大学院で地質学を専攻することになり、地質学の職に就いた後は生物学の勉強と研究をして、生物学の職に就き、最終的に今の環境に至ってみると、この異分野を縦断した経験は、それなりに役立っていると思う。

利点としては、どんな分野にもフラットに対応できるので、例えば環境修復プロジェクトのような、文理の多彩な専門分野が集まる問題解決型の研究を主導するのに便利である。一方弱点は、学部時代の文系から理系まで、浅く広く、の教育経験ゆえに、専門分野の基礎をしっかりと固めた場合に比べ、専門性が脆弱なことである。

これはあくまで個人的な経験なので、一般化はできない。とはいえ本センターのような異分野が集まる組織の長所と短所に、ある程度対応していると思う。センターがその長所を最も発揮できるのは、問題解決型の研究であろう。そうした機会はまだまだ多くはないが、センターは持てるポテンシャルを最大限に発揮できると思う。一方、センター所属の学生教育は、各分野の専門的な内容をしっかりと学んだ方がよいだろう。異分野融合には、実は高い専門性が必須だからである。これは私の一人異分野融合の経験から導かれた教訓でもある。

contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか

- 4 新任ごあいさつ
- 5 著書・論文紹介
- 8 活動風景



コロナ禍の中のソ連史研究

寺山恭輔

ロシア・シベリア研究分野／教授



ニューズレター 85 号に一文を寄せてから 2 年近くが経過した。ソ連史を専攻する筆者は、ちょうど 2020 年 2 月にモスクワで史料収集を行った後、Covid19 が終息しない限り外国でのフィールドワークは困難だろうと書いたのだが、その状況に変化はなく、ロシアを 2 年間訪問していない。本原稿を執筆している現在、オミクロン株感染者は激増しているが、重症化率が低いため、世界を見渡すと規制の撤廃や緩和を進める国も出てきた。この波が収まり、遠からず、国外でのフィールドワークが再開されることを期待するしかない。

閲覧した史料をその場で好きなだけ撮影して持ち帰ることのできる国とは異なり、ロシアの場合、時間節約のために注文するコピーを受け取るのは再訪時の一年後というところが多い。このタイムラグがくせ者で、コピーを受け取る頃には閲覧したはずの史料もよく覚えていない、などということがありうる。当面のテーマと関連した面白そうな史料もコピーしてきたが、すべての史料をすぐに論文に活用してきたわけでもない。現地での史料探しに出かけられないこの不自由な期間、このようにして蓄積してきた未利用の史料を整理し直した結果、論文になりそうなテーマがいくつか生まれた。コロナ禍のおかげで静かに過去を振り返ることで、恥ずかしながら、こんな史料も見たことがあったな、という新たな発見があった。

というわけで、最近取り組んだのは、ソ連赤軍内の兵士たちの考えていたこと、潜水艦や魚雷艇の建造、シベリア鉄道の輸送計画や交通関連の人事、発

疹チフスによる感染症とそれへの対応といった問題である。まったく関連ない話のように思われるだろう。しかし、やっている本人にとっては十分関連している。時代はいずれも 1930 年代前半のソ連極東を中心とする地域の問題で、日本人の起こした満洲事変と満洲国がかかわっている。兵士たちの肉声とは、満洲事変勃発に対して彼

らがどのように反応したのかについてであり、その動向を探っていた政治委員や治安警察が残した記録を利用して再現できた。一方満洲事変に際して、シベリア出兵の再現を懸念したスターリンのソ連指導部が目論んだのは、潜水艦による大陸と日本本土の連絡路の遮断であった。突貫工事によって小型潜水艦や魚雷艇を欧露で建造し、分解してシベリア鉄道で極東に運んだ。わずか 2 年の早業である。この大動脈シベリア鉄道は国防力増強のため、労働者や兵士も多数極東へ運んだが、システムが未整備のまま、長時間、長距離の人の移動は、衛生面の問題、すなわち感染症たる発疹チフスの蔓延を引き起こした。それを防ぐため、どのような対策をとったのかが問題となるが、中央や地方の当局者によって多数の布告が採択されていたこと、そして両者間の関係も明らかにできた。

いずれも先行研究はほとんどなく、新たに発掘した史料に依拠して、オリジナルな論点を提示できたのではない



ウラジオストックに運ばれた初期の魚雷ボートの一隻の進水前の点検 (1932 年)。『太平洋艦隊軍事歴史博物館』(ウラジオストック)にて寺山恭輔撮影 (2018 年 8 月)

かと考えている。日本と国境を接し、相互に影響を及ぼしあった隣国の歴史に関するこれらの断片的なパズルを組み合わせ、いずれは多面的な極東ソ連史を描けるよう取り組んでいるところである。これまでソ連の対新疆政策、対モンゴル政策についてまとめてきたが、これらと対極東地方政策を並べることで、ソ連の総合的な東方政策も浮かび上がってくるだろう。このような極東・東方ファクターを考慮しなければ、スターリン体制の深化の過程は理解できないと考えている。そして、このような作業は、戦後のシベリア抑留や現代の北方領土問題発生の淵源をたどることにつながるだろう。

スターリン時代の粛清犠牲者の追悼を契機に発足した人権団体メモリアルが 2021 年末、外国のエージェントとして解散を命じられるまでロシアの民主主義は後退したが、北京五輪期間中ウクライナの恫喝を続けているプーチン時代についても、いずれ「メモリアル 2.0」が暴くことになるだろう。

特別展示

エチオタビと歩きだす～日本からエチオピア、地下足袋の旅



田中利和

(ロシア・シベリア研究分野 (2020年3月まで) / 龍谷大学経済学部准教授)

会期 2021年10月16日～12月3日

会場 MARUGO TOKYO (東京都中央区)

エチオピア産地下足袋「エチオタビ」の着想までの経緯と、これまでの開発、普及にまつわる活動を、地下足袋の老舗メーカー「丸五」の協力を得て、パネルと現物の展示で紹介した。フィールドワークを共にした研究活動として、甲斐洋行氏による「エチオタビセンシングのための異業種連携のプロトタイピング」、伊藤大亮氏による

「エチオピアのとある村人達の身体機能を診てみました」、エチオピアの人々との絵画の協同制作から絵本づくりを行った是恒さくら氏の多言語絵本『うしのあし ひとのあし』についても発表した。

特別展示をつうじて、市民社会へアフリカ、地下足袋、フィールドワークによる共同研究の1つの形を伝えることができたと考えている。



Marugo Tokyo の展示会場の様子

講演会

大崎市誕生15周年・東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門設立10周年記念講演会「江戸時代の始まりと幕末・維新の岩出山」



野本禎司

(上廣歴史資料学研究部門/助教)

会期 2021年11月27日

会場 岩出山文化会館大ホール(大崎市)



パネルディスカッションの様子

当

部門設立以来、歴史資料学の実践の道とともに歩んできた大崎市岩出山にて、表記の通り記念講演会を2021年11月27日午後開催した。遠藤ゆり子氏(淑徳大学教授)「戦国時代から江戸時代初期の岩出山」、荒武賢一朗氏「戊辰戦争直後の岩出山—武士たちの足跡—」の講演ののち、菊地優子氏(大崎市教育委員会)、野本が加わり、

4名でのパネルディスカッションをおこなった。岩出山という地域に視座において歴史が動く戦国期と幕末維新时期に焦点をあてることで、地域の歴史の断絶面と連続面とを考える機会となった。当日は、事前予約制にて200名程の参加者があり、大崎市市長の開会挨拶、岩出山大蔵流謡曲保存会のセレモニーも行われ、盛会のうちに閉会となった。

学会会議

THE FOURTH TOHOKU CONFERENCE ON GLOBAL JAPANESE STUDIES
PRECARITY IN AN INTER-CONNECTED NORTHEAST ASIA

岡洋樹

(モンゴル・中央アジア研究分野/教授)

会期 2021年12月10～11日

会場 オンライン開催

東北大学日本学国際共同大学院では、毎年一回、日本学をテーマに国際カンファレンスを開催してきた。今年度は「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で、東北アジア研究センターが企画を担当した。Precarity in an Inter-connected Northeast Asia を全体テーマとして、オンラインで実施された。当日は、四つのセッ

ションと共同大学院在籍学生によるプロGRESS・レポートの一セッションが生まれ、25件の研究報告と2人の研究者によるコメントが行われた。本学や国内諸大学のほか、HASEKURA リーグに加盟校からヘント大学、ライデン大学、ローマ大学、そして今回はじめてロシアのノボシビルスク国立大学から参加があった。



会議ポスター

地滑りレーダー画像を一般公開



佐藤源之

(環境情報科学研究分野/教授)

2

008年岩手宮城内陸地震で発生した栗原市荒砥沢地区の大規模地滑り地域を佐藤研究室では地表設置型合成開口レーダー(GB-SAR)でモニタリングしてきた。現場で取得したデータを東北大学に転送し、幅500m高さ400mに及ぶ地滑り面を15分ごとに画像化しているが2021年10月から栗駒山麓ジオパークビジターセンター(栗

原市栗駒松倉東貴船5番地:旧栗駒小学校)の展示室で関連するパネルと共にリアルタイムの画像展示を開始した。同センターは栗駒山登山口に位置し、登山客や周辺の小中学生の自然学習に広く利用されている。今後このデータを利用し現場の安全を確保しながら地滑り地域を多くの人に見ていただくための準備を進めている。



荒砥沢レーダー画像ビジターセンターで公開開始

新任ごあいさつ

NEW FACULTY & POSTDOCS

#1



TSOGTBAATAR
Amarsaikhan

学術研究員(2021年10月~2023年3月)

ツォグバートル・アマルサイハン ▶ モンゴル科学技術大学講師を経て東北大学大学院環境科学研究科に入学。2021年9月博士課程修了。2021年10月より東北アジア研究センター学術研究員。

地中レーダーの応用研究を行っています

アマルサイハン氏は佐藤研究室出身のモンゴル科学技術大学教授ツェードラム博士の下で鉱物資源探査技術の講師を務めていました。東北大学大学院在学中は地中レーダーを用い、モンゴル草原における多くの現地実験を利用した土壌水分評価について博士論文をまとめました。一方モンゴルにおいて鉱山技師として井戸(ボアホール)にセンサーを降下させ地層を計測する検層技術に携わった経験を活かし、ボアホールレーダの研究も進めました。川内キャンパス内で計測したレーダーのデータと地中の電波伝搬をコンピュータシミュレーションによって解析した結果を照合することで地層を明らかにした論文で学会発表賞も受賞しています。更に大型レーダー「やくも」を利用した土壌水分計測、遺跡調査など幅広い応用研究を行っています。

(佐藤 源之記)

日本とモンゴル人女性の比較研究に励みたい

この度、2021年12月から2022年9月まで、国際交流基金の協力の下、東北アジア研究センターの高倉浩樹教授に受け入れていただき、当センターの客員研究員となりましたトゥルムフ オドントヤです。2011年に東北大学大学院環境科学研究科を卒業して以来、ほぼ10年ぶりの仙台滞在となります。久しぶりの仙台の町並みや大学キャンパスは非常に懐かしく、多くの思い出が甦ります。私はジェンダーと女性問題、中でも社会体制変容下のモンゴル社会における男女の性別分業のあり方とその変遷などを主に研究してきました。今回は、ポスト社会主義のモンゴル人女性のライフスタイルの変化に関して「専業主婦」の側面から日本との実態を比較し、専業主婦化の社会的背景及び要因などをより明確にし、通文化的な主婦研究を行う予定です。よろしくご挨拶申し上げます。

#2



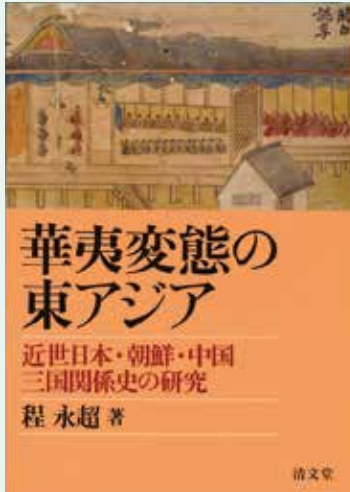
TURMUNKH
Odontuya

客員研究員(2021年12月~2022年9月)

トゥルムフ・オドントヤ ▶ 2005年山形大学修士課程修了。2011年東北大学博士課程修了(学術博士)。モンゴルでJICA業務に従事後、2018年から国立モンゴル科学技術大学付属高専学校に勤務。



著書

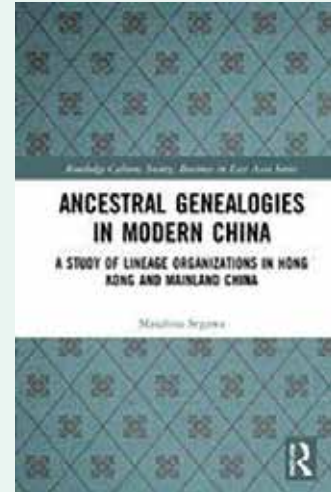


華夷変態の東アジア：近世日本・朝鮮・中国 三国関係史の研究

程永超 著
清文堂出版 2021年10月刊

text: 程永超

本書は、江戸時代の日朝関係を中朝・日中関係にも着目しながら解明すべく、対馬藩・幕府・朝鮮・中国の史料を比較検討し、近世日本・朝鮮・中国の三国関係史の構築に挑戦したものである。第一部「通信使と明清中国」と第二部「対馬藩と朝鮮・中国」の二部から構成される。従来17-19世紀の東アジア国際関係史研究は、日本と朝鮮、日本と中国、中国と朝鮮といった二国間関係史として成果が蓄積されてきた。そこで本書は外交使節と情報伝達に着目し、二国間関係史では見えなかった新たな歴史像、すなわち、日朝関係の背後に潜む中国の影響、日朝間の交渉が委ねられた対馬藩の中国情報収集活動、日朝貿易と中朝貿易の関連性、中朝交渉に際して示された清の日本に対する関心、直接の政治外交関係のない日中関係を朝鮮が媒介する場面などを具体的に明らかにした。日本史やアジア史だけでなく、前近代史や国際関係史に広いご関心をお持ちの方々にご一読いただければ幸いです。



Ancestral Genealogies in Modern China: A Study of Lineage Organizations in Hong Kong and Mainland China

Masahisa Segawa (瀬川昌久) 著
Routledge 2021年11月刊 (©2022)
※発刊日は2021年11月30日ですが、本の奥付の出版年は©2022となっています。

text: 瀬川昌久

本書は、著者がこれまで主要な研究テーマの1つとしてきた中国の父系親族組織・宗族(そうぞく)について、それが近現代社会においてもつ意味を、総合的に考察したものである。1980年代香港新界でのフィールド調査で観察された前近代からの生き残りとしての宗族の姿と、1990年代以降広東省、海南省等でのフィールド調査から得られた現代社会に復活を遂げた宗族の姿を詳細に分析・比較することにより、中国社会における長期持続的文化要素としての父系出自理念ならびに宗族が、現代社会において新たにどのような意味を獲得しているかを明らかにした。約40年間に及ぶ長期的な社会調査の成果を、英語による学術書として公刊することにより、日本や中国の読者はもとより、欧米の中国研究者や中国社会に関心をもつ読者層に、新たな知見をもたらすことを目指した著書である。なお、概要はRoutledge社ホームページ(https://www.routledge.com/)より“Masahisa Segawa”の検索にて同書の紹介ページを見ることができる。



著書



近代地域新聞からみた社会の実像

—宮城県・白石実業新報を読む—

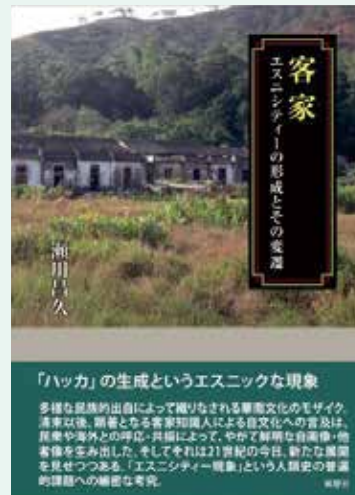
荒武賢一朗、阿部さやか 著

東北大学東北アジア研究センター
(東北アジア研究センター叢書第 69 号) 2021 年 11 月刊

text: 荒武賢一朗

日本で「新聞」と聞いて連想するのは、大手の全国紙や広域的なブロック紙だろう。もうひとつ、地域限定で耳寄りな情報を提供する新聞も存在感を持っている。本書は、これを「地域新聞」として 1911 年 2 月から 1914 年 4 月にかけて毎月 3 回、現在の宮城県白石市で発行していた『白石実業新報』（第 1 号～第 116 号）のうち、「学校」や「産業」、当時社会的関心の高かった「衛生」や「鉄道誘致」などのジャンルごとに主要記事を掲載している。また、当地の名産品や商店の紹介、時事問題や行政・社会への提言など、充実した紙面をできるだけ再現した。近代日本の地域社会でどのような出来事が起こっていたのか、人々は何を考えていたのか。そのような問いかけにヒントを与えてくれる記事の解説を含めた論考編 6 本、統計表 25 点、記事一覧も、あわせて御覧いただきたい。

*東北大学機関リポジトリ TOUR でダウンロード可能



客家

—エスニシティの形成とその変遷

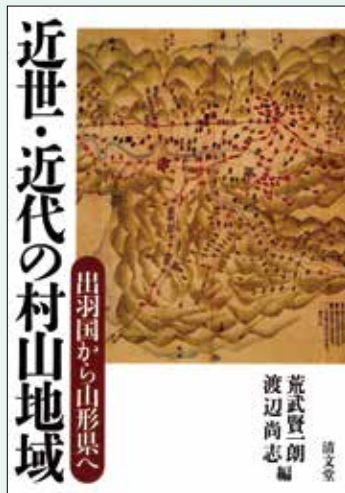
瀬川昌久 著

風響社 2021 年 12 月刊

text: 瀬川昌久

本書は、著者がその主要な研究テーマの 1 つとして取り組んできた中国漢族の中の 1 グループ・客家（はっか）について、約 30 年間にわたる研究成果を集大成したものである。客家は、中国南部の漢族の中でも特異な文化伝統や歴史意識を有する地方文化集団として知られ、古代北方漢族の純粋な末裔、多くの著名人を含む優秀な人材の輩出母体として宣伝されることも多いが、そのエスニックグループとしての形成は主に近代になって展開されたものである。そして、その過程には客家出身の研究者による自文化についての学術研究が深く関与してきた。本書は、そうした客家特殊論の構築過程を検証するとともに、それへの批判として形成された近年の客家研究をも対象化し、学術研究とエスニシティに関する言説の構築・解体過程について、客観的に分析を試みた意欲作である。なお、本書の概要については、風響社のホームページ (<http://www.fukyo.co.jp/>) の新刊書コーナーにて見ることができる。

論文



近世・近代の村山地域

—出羽国から山形県へ—

荒武賢一朗、渡辺尚志 著

清文堂出版（東北アジア研究専書第27号） 2022年1月刊

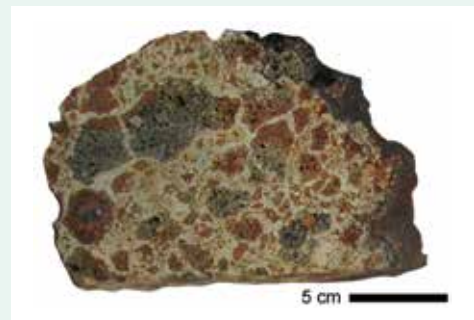
text: 荒武賢一朗

江戸時代の出羽国村山郡（現在の山形市など14市町）は、幕府や諸大名（藩）・旗本など、多くの領主が入り組む地域であった。日本近世史研究において、仙台藩のようなまとまった地域を有する「領国」に対して、村山郡のような領地錯綜形態は「非領国」と呼ばれている。本書は、おもに18世紀から19世紀における幕府直轄地・米沢藩・佐倉藩それぞれの支配体制や、山林の所有と利用をめぐる争論の具体的考察、村落における文書管理の足跡、幕末維新期の地域政治と「山形県」の成立過程を主題に、当地の具体像を解明することに努めた。分析には、村落や有力者、そして武士たちの記録など、多彩な歴史資料を活用している。従来の研究では、最上川舟運や紅花生産、そして百姓一揆などの民衆運動に注目されてきた。その成果をふまえながら、「支配のあり方」「近世から近代への移行」「文書継承の地域性」という新たな視角を加え、歴史的展開の深化に挑んでいる。

A direct evidence for disturbance of whole sediment layer in the subducting Pacific plate by petit-spot magma-water /sediment interaction

Norikatsu Akizawa, Naoto Hirano,
Kenji M. Matsuzaki, Shiki Machida, Chiori Tamura,
Junji Kaneko, Hideki Iwano, Tohru Danhara,
Takafumi Hirata

太平洋プレートの性質がひとつ実証された。2000年代に三陸沖で発見された新型火山プチスポットは水深6000m級の深海底で活動し、2020年の研究成果では、船上観測から火山周囲の深海堆積物に異常があることが確認されていた。この深海底の異常が2011年東北地方太平洋沖地震のプレート境界すべりの進行を妨げた可能性も指摘されていた中、有人潜水調査船「しんかい6500」により今回その堆積物が採取されたのである（写真）。マグマが焼きなました堆積物は火山体を覆い、構成鉱物や微化石の解析からマグマが海底下数100mもの厚い地層をかき混ぜていたことも判明した。環太平洋北西部の東北アジアは、太平洋プレートの沈み込みによって巨大地震など激しい地殻変動が発生する。これまでの太平洋プレートの概念は覆されつつあり、この新たな岩石の解析を更に行うことで、プレート境界すべりの実体が解明されていくことが期待される。



採取された岩石。海水によって急冷され砕けた溶岩片が深海泥の中に散りばめられている。

雑誌名：Marine Geology, <https://doi.org/10.1016/j.margeo.2021.106712>
刊行年月：2022年2月刊

text: 平野直人

コロナ禍での資料保全活動

鈴木淳世

(上廣歴史資料学研究部門／学術研究員)



2021年4月、私は上廣歴史資料学研究部門の学術研究員として着任した。それから約1年間、宮城県をはじめとする東北地方の、地域に伝わる歴史資料の保全・整理・研究に携わってきた。元々、上記の業務は2012年4月の部門設置以来続けられてきたことであり、私は、その部門の活動に関与することになったと言えよう。具体的には、目録作成や資料公開に必要な画像データを得るため、週2回、数名の事務補佐員とともにデジタルカメラでの資料撮影などの作業に従事し、それ以外の勤務日は資料の画像データにもとづき、目録作成などを行ってきた。とはい

え、私の着任以前から日本国内ではコロナ禍が発生しており、東北大学でも入構制限などの措置がとられていたため、上記の業務もコロナ禍以前とは、やや異なる形でなされていた。

そもそも、資料の保全活動は、所蔵者の許可を得て資料の伝存状況を確認・記録するところから始まる。次いで、クリーニング作業などの保存措置をとり、1点ずつ専用の中性紙封筒に入れ、かつ中性紙の文書箱に収納する。そして、資料を所蔵者から一時的に借用し、撮影作業にあたるというのが大まかな流れである。コロナ禍以前は博物館・資料館・所蔵者宅に出張し、現地で資料の整

理・撮影に従事することもあったが、コロナ禍以後はそのような出張を控える必要が出てきた。結果、資料の画像データにもとづいて目録作成などを行う機会が増えることとなった。また、撮影作業についても、感染防止対策のために事務補佐員の出勤人数を制限しながら行っていくこととなった。それが私の着任した当初の状況である。コロナ禍の動きを見極めながら段階的に事務補佐員の出勤人数を増やしてはいるものの、状況は現在でも大きく変わっていない。

もっとも、デメリットばかりではなかった。例えば、目録作成などに割く時間が増えたことも、見方を変えればメリットと言えよう。実際、私は着任以降、仙台藩領陸奥国柴田郡大河原村（現宮城県柴田郡大河原町）の商家・高橋忠助家の資料「大河原町高忠文書」など、いくつかの資料の目録作成に携わってきた。最近では、仙台藩領陸奥国加美郡城生村（現宮城県加美郡加美町）などに知行地を得ていた仙台伊達家の家臣・北家の資料「北家文書」（加美町教育委員会所蔵）の目録作成が完了し、ホームページ上で公開された。北家文書中には領地・役職・武芸・兵学などに関する古文書がふくまれており、仙台伊達家の動向や仙台藩地域史を研究する上での一つの手がかりを提供しえたと推察される。



東北アジア研究センター内での資料撮影の一例

編集後記

コロナ禍でしばらく海外からの客員受け入れが止まっていましたが、今号では久しぶりにトゥルムンフ・オドントや客員研究員の紹介記事を掲載できました。感染症対策が求められる状況はまだしばらく続くでしょうが、客員受け入れ本格化に加え、センター教員が海外調査を支障なく行える日が早く来ることを願っています。（後藤章夫）



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第92号

2022年3月25日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会

発行：東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!

